

科學と人生觀の關係に對する一考察

陳 紹 馨

人類は如何にして生れて來たか、如何にして彼の道をたどり、又たどるべきか……之等は今日の私が論ずるに大きすぎる問題である。私の此處に於てなさんとする處は、所謂「懷手式」の人生論に對して、科學の洗禮を受けた人生論を提唱する事である。此處に云ふ處の科學は、自然科學と社會科學の二つを指す。懷手式論者がとんでもない處から出發してとんでもない所に到着する様に、單なる自然科學者は、單純なる自然界の事實を其儘複雑に分化した人間社會に適用して、殘虐非道なる結論に到る事がある。之等は等しく斥くべきものである。自然科學と社會科學の洗禮を受けた人生論、それこそ吾人の要望する處である。（更に哲學の洗禮を受けた人生論を提唱する人があるかも知れぬが、ライフ・フィロソフィ其ものが已にフィロソフィであるから殊更に哲學を擧げない

事にした。）

從來「科學萬能」等と云つて色々科學に對して批難があつたが、もとより之は、從來の科學研究法の缺陷、並に研究者の超越なる態度に對する反動で、科學其ものの價值にかゝはるものではない。眞劍なる探求者は、凡ゆる事實より綜合して歸納しなければならぬ。この意味に於ても、吾人は科學者の開拓せし處を検討し、之を利用しなければならぬのである。科學研究は、科學に對して無智なる人が叫んでゐる如くに、乾燥無味なものではない。科學研究其ものが一種の詩であり、藝術であるのである。殊に自然科學の研究は、方法論研究の實際訓練として人間生活に絶大なる價值を有するものである。

科學が如何にして吾人の人生觀に材料を提供するか、以下に其一端を示さうと思ふ。

一

最近支那の論壇を賑はしたかの人生觀論について吳稚暉氏は興味の高い議論を發表した。人生觀の科學的基礎を示す適宜なものであると思ふから、以下土田杏村氏の「日本支那現代思想研究」より引用して見やう。

科學と人生觀の關係に對する一考察

- (1) 天文學、物理學の智識に根據して、空間の無窮の大を知る。
- (2) 地質學及古生物學の智識に根據して時間の無窮の長さを知る。
- (3) 一切の科學に根據して、宇宙及其中の萬物の運行變遷は皆是れ自然的であり、超自然的主宰者或は主宰者に依らないことを知る。
- (4) 生物科學の智識に根據して、生物界の生存競争の浪費と慘酷を知る。
- (5) 生物學、生理學、心理學の知識に根據して、人は是れ動物の一種であり、他の動物との間には程度の差あつて種類の區別のないことを知る。
- (6) 生物科學人類學社會學の智識に根據して、生物及人類社會の進化した歴史と進化の原因を知る。
- (7) 生物科學及心理科學に根據して、一切の心理現象には凡て原因のある事を知る。
- (8) 生物學及社會學の智識に根據して、道德禮教は變遷するものである事を知り、且其變遷の原因は、凡て科學的方法を以て之を尋求する事が出来る事を知る。
- (9) 新しい物理化學の智識に根據して、物質は死物ではなく活物であり、靜的ではなく動的である事を知る。

る事を知る。

- (10) 生物學と社會學の智識に根據して、個人則ち「小我」は死滅するも、人類則ち「大我」は不死的である事を知る。

大體以上の通りで、胡適氏は之を「科學的人生觀」と呼んで推奨し、かくの如き科學的人生觀の中に美も詩意も道德的責任もあり、且十分に「創造的智慧」を運用する機會もあると云つた。

三

上に列舉したものの中、たとへば(5)の如きは、生物學や人類學の智識を有しないものには、了解しかねる處があると思ふ。「人類は萬物の靈長」等といつて人類を他の動物より懸絶したものの如く思ふ人もあるが、之は科學智識のない人の誤謬で、兩者間には明かなる漸階があるものである。人類は、他の生物の如く遺傳進化の法則に逸ひ、生態學上の原則に則るものである。若し人類と他の脊椎動物との比較形態學的、比較生理的研究をするならば、何人も其驚くべき整齊に驚異するであらう。

從來人類を他の動物より分けるものは主として其精神能力にあると唱へられて來たが、心理上の

事についても人類は他の動物より懸絶してゐるものではない。成程文明人には微分積分あり、物理化學あつてどの動物にも之を見る事が出来ないが、吾人は、一より四迄數へる事さへ出来ない人類（たとへば濠洲の土人の如き）の存在する事を知らなければならぬ。之に反して高等動物は、もし骨折つて教育すれば、或程度迄計算をする事が出来、單語を綴る事が出来、ピアノをさへひく事が出来る。高等動物には、本能以外に驚くべき程の有意的な智能を有してゐるものもある。動物は常に凡ての點に於て人類より無智だと斷定するは吾人自身の無智を斷定する事に外ならぬ。

情的方面に於ても然りで、深く研究した人にとつては、異性愛並に母性愛に於て人類は他の高等動物よりも常に優越してゐると斷言するに躊躇する位である。近來セキセイインコといふ鳥がよく結婚の贈物にされるが、それはこの鳥の愛情の深い事から來たのである。雄でも雌でも一匹が死んで了へば殘された淋しいものは間もなく後を追つて行く。考へるだに涙ぐましいではないか？ プレームの如きは「眞の戀愛は鳥類に於てのみ見出される」と叫んだ位である。人間の夫婦の仲の良い事を「鴛鴦の様に仲が良い」等といつて鳥になぞらへるのも面白い事である。かの白樂天の詩

七月七日長生殿、夜半無人私語時、在天願作比翼鳥、在地願爲連理枝。

の中に歌はれた「比翼連理」の傳説も實に美しいものである。連理とは、接近して生た二本の枝が一つに癒合して離れられなくなつたものを指すが、夫婦も一旦契を立てたら決して離れるものではなく一生互に愛し合ふべき理想を之を托したものであらう。比翼とは、雄も雌も各々一枚づつの翼を有し、二匹が一緒になつて初めて飛ぶ事が出来るといふ傳説の鳥である。雄でも雌でも一匹が死んで了へば他の一匹は飛べなくなつて共倒れになる。生死を共にする夫婦の愛は何と美しいものではないか？

母性愛に於ても、高等動物には人類のそれに劣らない美しいものがある。人類は母の愛を「枯野の雉、夜の鶴」といつて鳥類の母性愛になぞらへ、ペリカンが母性愛の象徴になるが如きはよくこの事實を語るものである。

四

精神能力の第三の重要な方面は意——則ち道德の方面である。人類が道德的方向に於て他の動物よりすぐれてゐる事はもとより議論する餘地がない。智及情の方面に於ても人類は他の動物よりすぐれてゐる。只私の此處に示さんとする處は、兩者間の差異は質的の差異でなくして量的の差異

であるといふ點である。人智の進歩しただけに人類の道德は、大なる發達をしたが、併し人類の道德は、智慧ある人の目にはまだ極めて多くの矛盾不合理があり、殊に道德を盾にして不道德を行ふといふ痛心な現象さへある。

犬の社會に於ては「飼主の手を噛む」といふ言葉は、特殊の場合（たとへば犬の精神が異常した場合の如き）の外は、人類社會に多く行はれてゐる事實の不當な比喩としてのみ用ひられる。之に反してキリストを賣つたユダは何と人間社會に多い事でせう。動物の愛、殊に犬の主人に對する愛は、涙なくしては聞く事の出来ないものがある。「この世の中に於て、自分自身よりも貴方を愛する只一つのは犬である」と或古い作家が書いた。ダーヴィンは其「人間由來記」に於て、感激的な筆致を以て犬の愛を記してゐる。或生理學者が彼自身の犬を活體解剖の材料に用ひた時、胸を割かれた犬は、主人を傷けないのみか、彼は主人の手をなめた。何と殉教者となつたこの犬の主人に對する愛は絶大なるものではないか。「もしこの人が活體解剖によつて人類の智識を増進したのでなかつたら、或はもし彼が鐵の心臓を有するものでなかつたら、彼はすぐにも自殺したであらう」といふ様な事をダーヴィンは云つた。人間の意地のきたない事を「犬の様だ」といはれてゐるが

之は大なる誤謬である。寧ろ心の美しいものを指して「犬の様だ」と云はなければならぬ。

人間は、動物が牙を以て相争ふ事を「野獸の如き」といつて不道德なものとして斥けてゐるが、人間が弓や銃で殺し、鎌や斧で切る事は道德的だと云ふ事が出来やうか。毒藥で川の魚を全滅させたり、言葉通りの一網打盡をしたりする人類の異種間道德は決して他の動物のそれよりすぐれてゐない。殺生禁等と云つて生物を殺さない事を美德としてゐる人もゐるが、之又幼稚な慰めである。他の生物を殺さずして生物は生きて居られやうか。鳥や魚だけが生物ぢやない、三度の飯になる米も木の葉も皆生物である。體中に於て吾人を蠶食し、吾人の生命を奪ふ細菌も又生物である。吐き出された唾について出た口蓋粘膜の上皮細胞、遺精の時に射出された精液中の精虫も、又生物である。他の生物を殺さずして生物は生きてをられやうか。もし強ひて異種生物間の道德といふものを立てやうとするなら、吾人は「生活上必要でない殺生をする事は不道德である」といふ事が出来るかも知らぬ。この點より云へば人類は明かに他の生物よりも不道德である。

五

更に進んで、同種生物間の道德について見やう。ダーヴィンは其「種原論」に於て、同種個體間の

競争を強調して來たが、之事についてクロボトキンはその著「相互扶助論」及「倫理學」に於て修正をした。クロボトキンは、ダーヴィン——殊にダーヴィニストが自然淘汰を説明するに當つて、餘りに同種個體間の競争を重視し、誇張した事並に動物が死滅するのは、直接の競争によるよりも自然の迫害による場合が多い事を指摘した。生は闘争で、適者生存である。有機界を通じて、生の爲の闘争が最大の通則である事を否定する博物學者はあるまい。併乍、この生の闘争に於て——異種動物と競争する上に於て、殊に自然の變化に適應する事に於て、如何なる動物が残存する最適者であるかを究めるならば、それは互に競争する種でなくして互に扶助する種である。生存競争と相互扶助とは、共に進化の一要素であるが、後者は前者よりもより創造的な、より重要な要素である。従來は、不適者の絶滅にのみ注意を向けて悲觀的な結論に至つたが、吾々は寧ろ、變化する外圍に適應し最適者として殘存する生物が如何にして其目的を達したかを究め、其根本原理をさぐらなければならぬ。之がクロボトキンの議論の要旨である。異種動物間の生の闘争に於て——異種動物間の競争並に變化する自然環境に適應する事に於て、相互扶助は適者の最大武器として要求された。彼は其「相互扶助論」に於て、特殊の事情の下に置かれた少數の肉食動物の外、大底の同種動物は

ダーヴィン主義者流の説いてゐる如くに牙を以て相争ふものでなく、直接間接に相互扶助する事實を示した。動物の同種間道德は、吾々が想像するよりもずつと善良なものである。

之に對して人類間の同種間道德は如何なるものであるか？ 殘念ながら吾人は動物間に行はれるそれよりもヨリ動物的なものを發見するのである。英國人は獸を狩る如くにアフリカ人を狩り、オランダ人は蟻をつぶす様に瓜哇人をつぶした。奴隸の買賣、黒人の私刑等々、人類の同種間道德は實に言語道斷である。同民族間に於ては、愛他謙讓の如きを徳となし、殘忍高慢の如きを不徳とするが、異民族に對する時、殊に弱小民族に對する時、驚異すべき事ではないか、道德の價值が一轉して了ふのである。この場合には最早愛他謙讓の如き道德はない。いや、この場合には凡ゆる殘虐、凡ゆる獸行を盡して弱小民族を苦め、以て自民族の腹を肥す事が道德的だと云はれる！ 之でも人類は「萬物の靈長」なのだ。

六

人類社會に行はれる積局的利他の現象を指して、人類と他の動物との分岐點とする人があるかも知らぬ。事實上この現象は人類發達の一大產物であつた。併乍それは同時に人類の社會事情が齎し

たものである事を知らなければならぬ。ウォーレス等の指摘した如くに、人類は其智識の進歩した爲に生活上他の生物や自然環境と戦ふ必要が少くなり、生活が比較的に保全された爲に自然淘汰が漸次力を失つた。自然淘汰力減衰の結果として不具及低能なものも生残する様になつたが、之等の存在は彼等の處置を要求するのである。彼等は人類の同情心に訴へ、進んでは人類の積局的利他心を呼び起す様になつたのである。殊に自然淘汰力減衰の代償とも見るべき激甚なる智的淘汰は、近代社會に於て大企模の生活難を齎し、所謂慈善事業を人類社會の必須現象の一つにした。自然淘汰力の比較的に強く働いてゐる未開人社會に於て、所謂慈善事業なるものの存在しない事、乃至は其範圍の極めて狭い事に徴しても、上の説明は肯定さるべきであると信じる。吾人は、慈善事業を以て人類の誇りとなすよりも寧ろ社會疾患の孤息的治疗である事を知るべきであり、又クロボトキンの「相互扶助論」中に引用された異種鳥類間の積局的利他の現象に徴して、必要があれば人類以外の異種動物間にも積局的利他の可能性があると云ふ事が出来るかも知らぬ。人類社會の積局的利他の現象も又人類を他の動物より懸絶せしめるものではない。

要するに人類が自身を宇宙の中心となし、萬物は彼の爲に創造されたものであると考へる事は最

大の説謬である。人類は、宇宙の中身である處か、恒星界を疾走する太陽系の一小家族の地球の上に假の宿を結んでゐる朝露にすぎない。人類の現はれる前この地球上に生物が棲息した。人類の去つた後にも生物が棲息するであらう。この地球は誰かが人類の爲に拵へたものでも何もない。偶然太陽から分離したものだ。デボン紀が魚類の時代であつた様に、デューラ紀が爬虫類の時代であつた様に、第四紀の仲積層が人類の時代であつたのだ。魚類爬虫類が衰滅する様に、人類も衰滅するであらう。周期間に起る氷河現象が常に吾々を脅威してゐる。天體の變化、衝突等常に人類の滅亡を豫言してゐる。人類が今日の笑殺に耐へない偏狹な愛國心から醒めて遠き未來の爲に研究しない限り、人類の滅亡は火を見るよりも明かである。

以上記したものは、科學と人生觀の關係のホンの一點を論じたものに過ぎないが、宇宙に於る人類の地位を知らしめ、宇宙の凡ゆる存在は自分の爲に拵へたものだとか自分は世界中で一番偉たい人だとか云ふ様な近眼的誇大妄想狂的な考へ方や、子供が「私の玩具は貴方のよりも良いよ」といふ様な心持で、「私の家柄は皆のよりも良い」とか「私の國は皆のよりも良い」とか云ふ様な稚

氣満々たる狂信的な考へ方は、共に人類を偏狹な闘争に導き、共倒れの日を早めるものに外ならぬ事を知らしめ、以て「世界の市民」として廣大なる心胸を養ふに役立つものである信ずるのである。

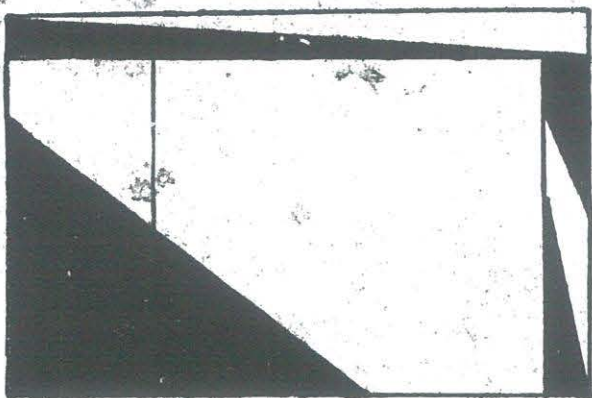
上來記したものは、主として自然科學と人生觀との關係の事であるが、社會科學は、人生觀の洗禮者としてより重大なる任務を有するものである。如何にして在來唱へられて來た道德の或ものは不合理であり、寧ろ人類を不道德に強ひる看板となるものであるか、如何にして個人の過ちに歸せられた罪の或るものは社會の負はなければならないものであるか、人類の眞正の使命は何であるか之等を吾々に示すものは社會科學である。筆者の想、筆、共に熟せず、此處により重大なる社會科學と人生論の問題を論ずる事が出来ないのは残念であるが、更に別日を期して精進する積りである。(一九二七年四月一八日)

日本の工業政策と中國服

遊 東 風

一、日本は今や凡べての方面に於て行詰つたのである！ この斷案は恐らくは今日世界中の何れの國にも當嵌まることと思ふ。然るに日本は特に他の國々と異なる難題が控へてゐるのである。即ち人口過剰の問題、それに年々歳々七十餘萬の人口がこの限られた狭い領土の上に増加して行くことである。この状態が續けば五十年後には現在の人口七千萬に倍加して一億四千萬人に達することは理論上必然的である。現在でさへ殆ど立錐の餘地がない程に稠密な有様を呈してゐるから、五十年後の状態に想到すればこの日本の地上には人間が蛆虫のやうにうじくになるであらう。そればかりではない、人口の増加に伴ふ食糧の問題が又必然的に同時的に起るものである。現在では國內で生産する穀物が僅かに八ヶ月しかの食糧になれないものである。一年の後の四ヶ月は全然外國に仰

新 生



第一集

1927

新生文集

第壹集

一九二七・八

卷末に添へて

雲

茫

「新生」第一集目次

卷頭辭……………雲萍生(一)

宣言……………同人(一)

論說

植民地政策の轉化觀……………江夏生(五)

科學と人生觀の關係に對する一考察……………陳紹馨(一七)

日本の工業政策と中國服……………遊東風(元)

人的生命の意義及び人類の倫理……………郭華洲(元)

晩年之孔子……………張聘三(五)



生物學談叢……………高不驕(五)

詩・隨筆

秋曉的公園……………懶雲(七)

春のなやみ……………望三生(七)

創作

補大人……………懶雲(八)

村夫子的悲哀……………群山(八)

卷末に添へて……………雲萍生(九)